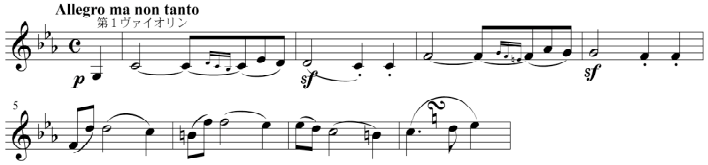
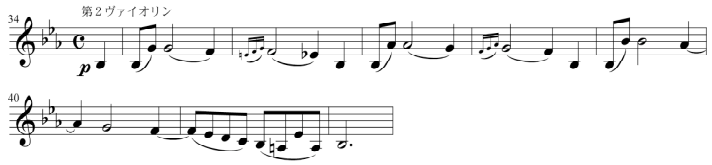
弦楽四重奏曲第４番ハ短調作品18の４

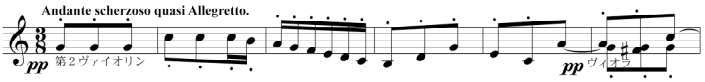
第１楽章、第１主題



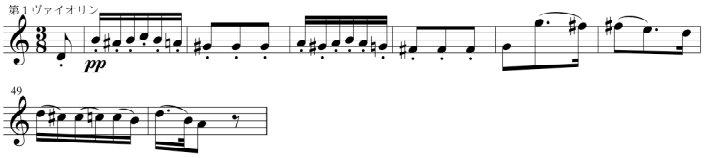
第１楽章、第２主題



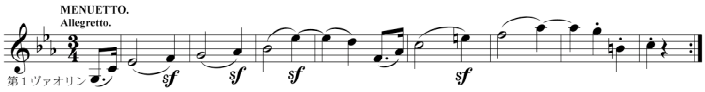
第２楽章、第１主題



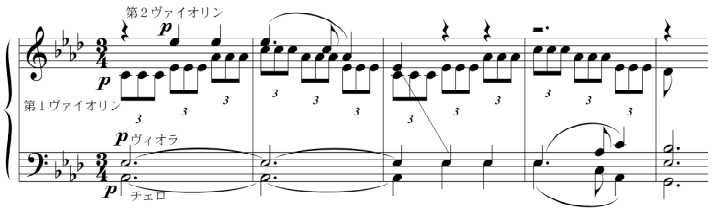
第２楽章、第２主題



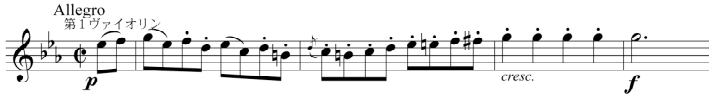
第３楽章、メヌエット主題



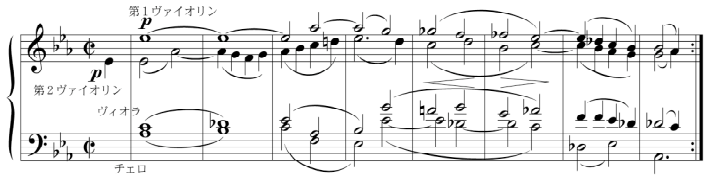
第３楽章、メヌエット、トリオ部冒頭



第４楽章　主題Ａ

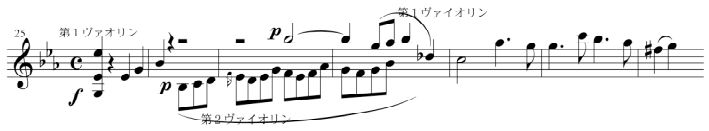


第４楽章、主題Ｂ

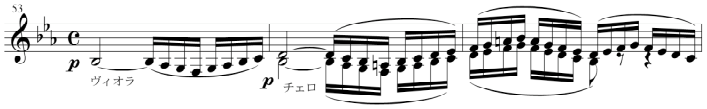


弦楽四重奏曲第10番ヘ長調作品74

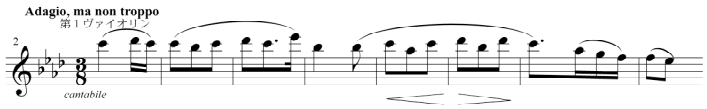
第１楽章、第１主題部



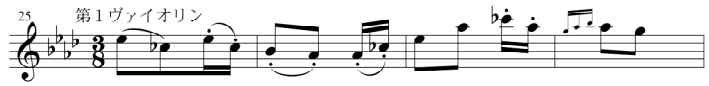
第１楽章、第２主題



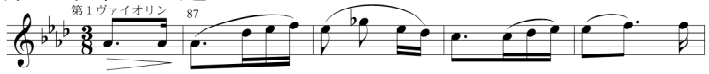
第２楽章、主題Ａ



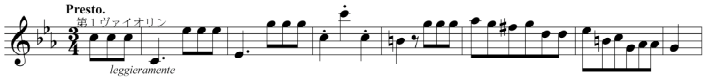
第２楽章、主題Ｂ



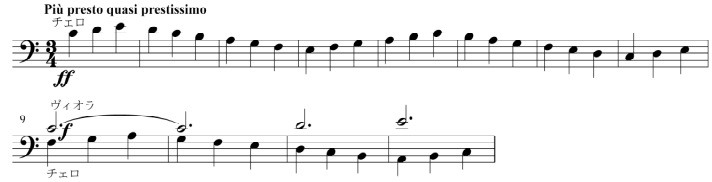
第２楽章、主題Ｃ



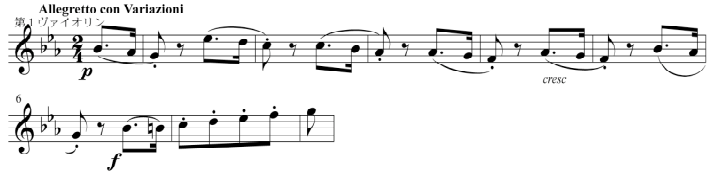
第３楽章　スケルツォ主題



第３楽章、スケルツォ、トリオ主題

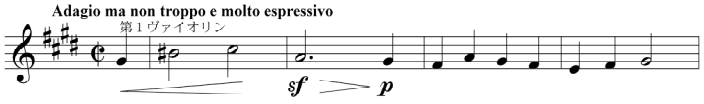


第４楽章、主題

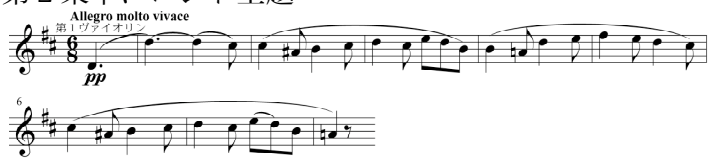


弦楽四重奏曲第14番嬰ハ短調作品131

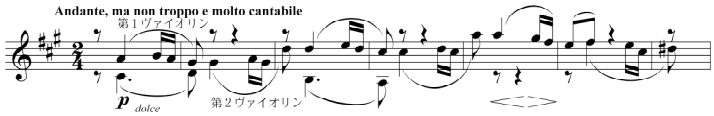
第１楽章、フーガ主題



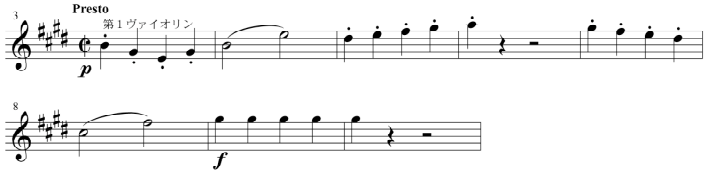
第２楽章、ロンド主題



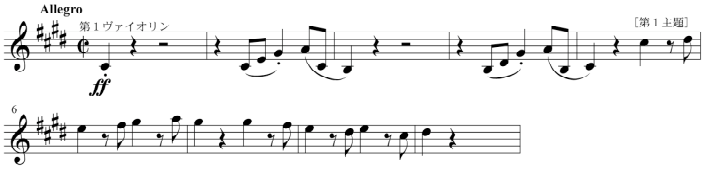
第４楽章、主題



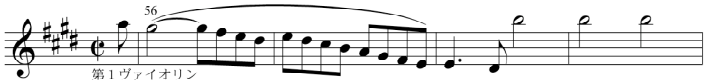
第５楽章、スケルツォ主題



第７楽章、冒頭（第１主題を含む）



第７楽章、第２主題



感覚を研ぎすませて

ベートーヴェンといえば、西洋音楽の流れに決定的な影響を与えた作曲家の一人だ。私が音楽史を学んだアメリカの教科書においても、彼一人が一つの章となるほどその扱いは大きい。クラシックの作曲家を目指す人ならば、ベートーヴェンは生きた教科書であり、眼前に立ちはだかる壁でもある。彼以降、19世紀の作曲家たちは、例えばショパンはピアノ曲、シューベルトは歌曲、ヴェルディはオペラというように、それぞれの得意分野を開拓しようとしたが、これも、あらゆるジャンルに傑作を残したベートーヴェンのようにはいかないという意識が作曲家たちの中にあったからではないだろうか。

そのベートーヴェンの音楽は、時に厳しく、演奏者のみならず、聴き手にも挑戦的だ。音楽表現の濃厚さに、疲れることさえある。しかしそれでも聴きたい・演奏したいという魅力が彼の音楽にはある。聞き終わった後の充実感たるもの、他の作曲家にはないものがあるからなのだ。

ところでベートーヴェンという名前自体は、クラシックを全く聴いたことがないという人にも知られている。「ジャジャジャジャーン」という第５交響曲（日本では俗に《運命》交響曲と呼ばれている）の冒頭は富山ではコマーシャルにも使われている。

しかしベートーヴェンという名前が彼の生前から今日まで生き延びてきたのは、第５交響曲のショッキングな出だしがあったからではない。評論家が彼の偉大さを高らかに吹聴してきたからでもない。何よりも彼が楽譜に残した音楽が、世代を越えた演奏者によって演奏され、常に感動を聴き手に与え続けてきたからだ。良い作品があり、それに感動する。そんな自然な行為がベートーヴェンをここまで「偉大」な存在にしてきたのである。

岩瀬から始まる弦楽四重奏の全曲演奏のシリーズは、今日まで、どうしてベートーヴェンの名前がクラシックの代表者として人々の心に刻まれてきたのかを、集った聴衆が自ら体験できる場なのである。有名だから聴くベートーヴェンではなく、なぜベートーヴェンが有名になったかを一緒に感じ・考える演奏会になることを、心から祈っている。

いま、文化の香り漂う森家の中で、演奏者と聴き手が寄り添って時間と空間を共有している。全身の感覚を研ぎすませて東西の優れた遺産を味わおうではないか。（谷口昭弘）